

本学2年生における感染症の知識の現状

立松 美穂、中井 裕子、坪内 梨花、大久保 英一

帝京短期大学 ライフケア学科

The present status of student's knowledge level on infectious diseases at our junior college

Miho Tatematsu, Yuko Nakai, Rika Tsubouchi, Eiichi Ohkubo

Abstract

One of serious problems in current college education is poor study motivation and insufficient learning achievements prevailing among students. In our college is also faced with such problem. The curriculum which students learn for 3 years at the junior college contains a wide variety of subjects. To investigate the learning level of students at the college will be very necessary to lead them to the success in the state examination for the licensed medical technologist.

The students' knowledge level on infectious diseases was investigated at the 2nd year students.

In this paper, the investigation results are described with the emphasis on their correlation to lectures with respect to the contents and the time given at classes.

要旨

近年、学生の学習意欲や学力の低下が問題となっているが、本学も例にもれず、このような危機的問題に直面している。3年間という短い学習期間の中で学生が学ぶべき内容は多岐に渡るため、在学中の知識レベルを知ることは、臨床検査技師の国家試験合格に導くために必要なことである。

そこで、短期大学2年生時点における知識レベルの現状を感染症について調査し、講義実施の有無および学習時期との相関性について検討したことを報告する。

1. はじめに

2009年10月現在、日本の18歳人口はおよそ121万人であり¹⁾、大学および短期大学の入学定員を割る「全入時代」となっている^{2), 3)}。また、いわゆる「ゆとり世代」であることも影響しているのか学生の学力低下が問題視されている。

本専攻では入学前の学生を対象とした化学や生物学の入学前教育、入学後の学生に対して化学のリメディアル教育を行っているが、それだけではなかなか学生の学習意欲の改善や学力の向上に直結させることは難しいのが現状である。

2. 目的

本研究の目的は、学生の意識及び学力の現状を調査することである。

学力の現状を調査することは、適切な指導を行うための一助となり、最終的に学生の国家試験合格率向上につながると考えられる。そこで、1年生より複数の教科で学習している感染症に関する知識について学生

の知識レベル調査を行った。

さらに、平成22年度より継続調査している「性に関する知識の現状」における性感染症知識レベル調査の結果と比較することで、1年間の学習による学生の知識の向上度を確認した。

3. 調査方法及び項目

調査対象は平成22年度（1年生時点）「性感染症に関するアンケート」を実施した学生現2年生74名である。

今回は、平成22年度に実施したアンケートの調査項目の性感染症9種類（クラミジア感染症、尖圭コンジローマ、性器ヘルペス、梅毒、淋病、膣カンジダ症、毛ジラミ、膣トリコモナス、エイズ）に加え、代表的な感染症（麻疹、風疹、水痘・带状疱疹、流行性耳下腺炎、結核、インフルエンザ、マラリア、急性灰白髄炎、ウイルス性肝炎、子宮頸癌、白癬、ウイルス性胃腸炎、マイコプラズマ肺炎、腸管出血性大腸菌による食中毒、カンピロバクターによる食中毒、黄色ブドウ球菌による食中毒）を追加した計25疾患に関する

る知識レベルについてマークシート回答用紙を用いて調査した^{4), 5), 6)}。

入学時の状況を調査するため、平成23年度に入学した1年生に対し、平成22年度に実施した内容と同じ「性感染症に関するアンケート」を平成22年度の学生と同時期に実施し、結果を比較することで知識レベルの差異についても検討を行った。

4. 結果

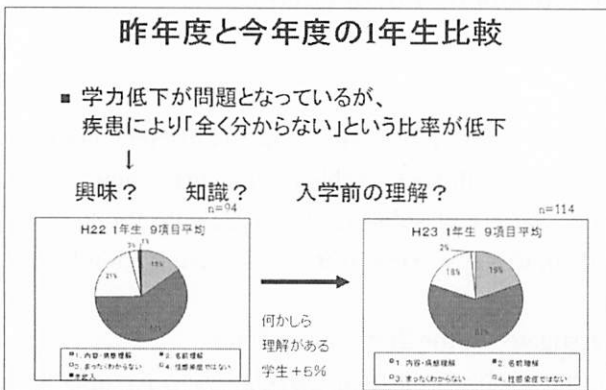


図1 昨年度と今年度の1年生比較

図1のグラフは継続調査を行っている「性感染症に関するアンケート」の集計結果である。平成22年度と平成23年度いずれも6月に1年生を対象に実施し、性感染症についての知識レベルの比較を行った。

平成23年度の1年生は平成22年度と比較すると全体的に知識が高く、「全く分からない」と回答した学生が減少した。さらに、名前だけでなく「感染症の内容や病態まで理解している」という学生が5%も増加している。つまり、本学入学前までに何かしらの形で性感染症について学んでいる学生が多くなってきたといえる⁷⁾。

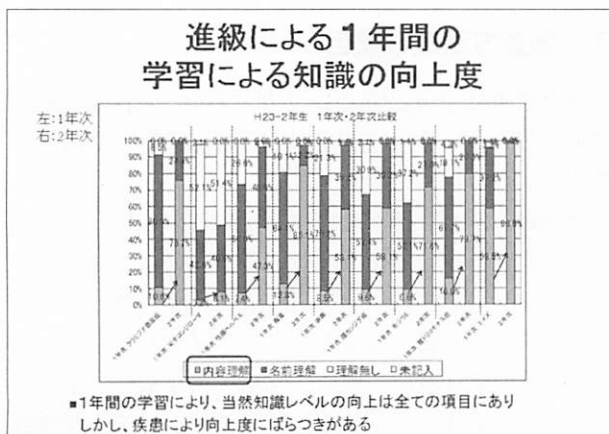


図2 進級による1年間の学習による知識の向上度

図2のグラフは、1年間の学習による知識の向上度を示したものである。平成22年度と平成23年度の結

果を比較すると、どの性感染症についても「内容理解」の部分の増加により、明らかに知識が向上したことが分かる。しかし、疾患により向上度に差があることも確認できる。

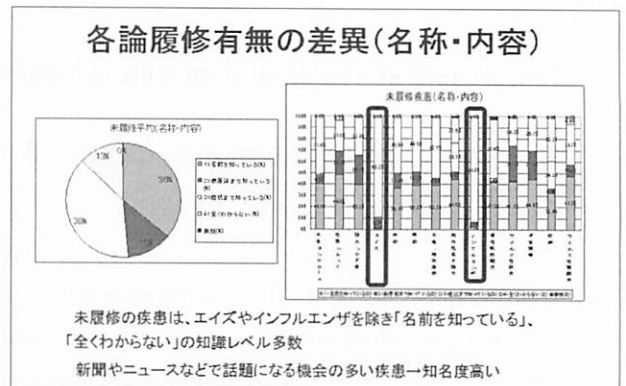


図3 各論履修有無の差異(名称・内容)

図3のグラフは、微生物学の分野において各論を履修していない疾患についての名前と内容の理解度を示したものである。エイズやインフルエンザを除き「名前を知っている」、「全く分からない」の知識レベルが多数を占めている。

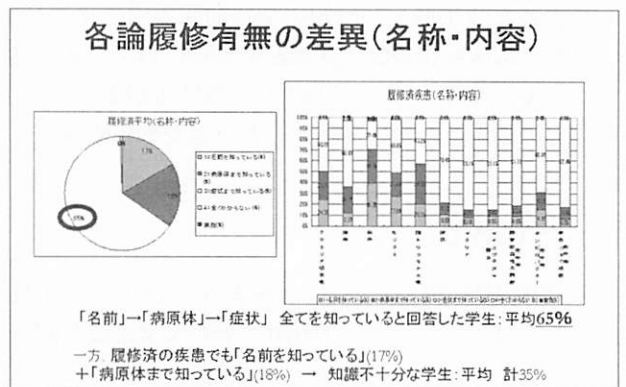


図4 各論履修有無の差異(名称・内容)

図4のグラフは、履修済疾患の理解度を示している。「名前」「病原体」「症状」の全てを理解している学生が平均65%いる一方、履修済の疾患にも関わらず「名前を知っている」「病原体まで知っている」の知識レベルの学生が平均35%であった。

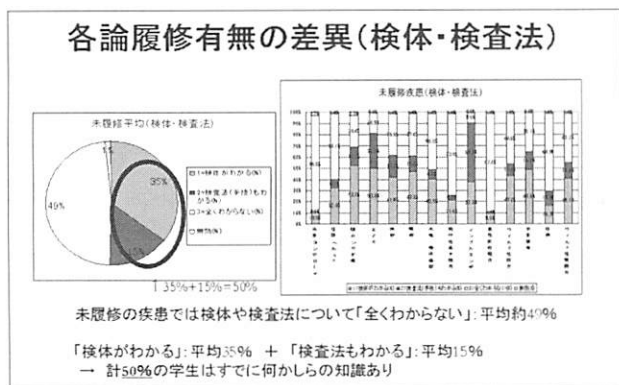


図5 各論履修有無の差異(検体・検査法)

図5のグラフは、微生物学の分野で各論を履修していない疾患について、検体と検査法の理解度を示したものである。検体や検査法について「全く分からない」と回答した学生が平均49%いたが、「検査法も分かる」という回答が平均15%あり、およそ半数の学生は検体の知識がすでにあることを示している。

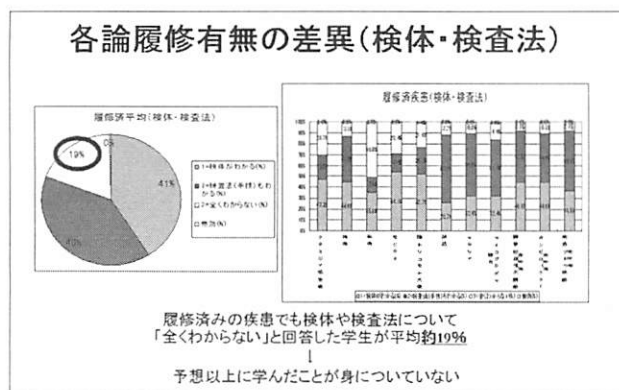


図6 各論履修有無の差異(検体・検査法)

図6のグラフは、履修済疾患の理解度を示したものである。履修済疾患でも、検体や検査法について「全く分からない」と回答した学生が平均19%もおり、履修しているが知識が定着していないことが分かった。

5. 考察

結果より考察すると、医学用語の理解が不十分であることが一因と考えられる。一例として、アンケート実施日に各論まで履修していない疾患の一つに白癬があった。「白癬」という聞き慣れない言葉に対し「全く分からない」と回答した学生が68.9%いたが、もし「水虫」と質問をしていたら結果は異なったであろう。このことから、アンケートの実施時期における各論の履修状況によって結果に影響がでたと考えられる。

しかし、多くの感染症については1年生もしくは2

年生のアンケート実施日までに、一度は学んだことがあるにも関わらず「全く分からない」・「名前を知っている」といった知識のレベルしかない事例もみられた。

つまり、病原体や症状、検体や検査法についての知識が定着していないと考えられる。一方、食中毒やエイズなど新聞やニュースで話題となる機会が多い疾患については、履修後に知識が定着し、確実なものになっていると推測される。

6. まとめ

今回の調査により、すでに学習した感染症についての知識が曖昧で定着していない学生が多いことが分かった。指導する教員は「これは習っているでしょう」と、講義を進めることが多くなりがちだが、学生は3年間という短い学習期間で非常に多くの内容を学び、国家試験を受験しなければならない。学ぶべき内容が多く、新たなことを学習すると、以前に学習した内容は忘れがちになる。

対策として、すでに学習した内容と新たな内容を結びつけながら知識を定着させることや正しいイメージを持つことができるように指導を繰り返すことが重要と考えられる。繰り返し学習することで、学生自らの興味を高めて学習へ取り組むことができれば学力の向上へつながる。学習する姿勢を身に付けることは最終的に国家試験突破への近道となるであろう。当然のことだが、教員は常に学生の知識レベルを意識・把握しながら講義及び実習を行うことが大切だと考えられる。どのような方法で知識レベルを知り、フィードバックすることが効率のよい学習につながるか、その手法に関する検討が今後の課題である。

7. 謝辞

平成22年度および平成23年度のアンケートに回答していただいた、本学ライフケア学科身体環境ケア専攻臨床検査コースの学生の協力により、本研究を遂行することができました。本コース学生の皆さんに感謝いたします。

なお、本論文は第6回日本臨床検査学教育学会学術大会で口頭発表したものを基とし加筆したものです。

参考文献

- 1) 人口統計資料集2011 表2-3「性、年齢(各歳)別総人口:2009年」、総務省統計局
<http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Data/Popular2011/T02-03.htm>
- 2) 平成19年文部科学白書 3章1節 表2-3-3
 「18歳人口及び高等教育機関への入学者数・進

学者率等の推移」、文部科学省

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200701/002/003/004/2_3_3.pdf

- 3) 平成23年度 学校基本調査速報、p.1、文部科学省 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2011/08/11/1309705_1_1.pdf
- 4) 眞野喜洋・片山博雄、「臨床検査学講座 公衆衛生学 第2版」p.19 医歯薬出版
- 5) 岡田淳・設楽正次・長沢光章、「臨床検査学講座 微生物学 / 臨床微生物学 第3版」医歯薬出版
- 6) 「2010/2011 第3章感染症対策 国民衛生の動向・厚生指標 増刊」第57巻第9号 通巻第896号 P.124、財団法人厚生統計協会（2010）
- 7) 高山みつる、保健室発「からだの学習」、東山書房（2009）